



天然有機化合物討論会

13日から東大・安田講堂で開催

阿部 郁朗 実行委員長に聞く

◆…天然有機化合物討論会とはどのような学会ですか。

「1957年から年に1度開かれてきた歴史ある学会で、今回で65回を数える。理学、薬学、農

るようだ。天然物化学は、2015年に大村智氏がノーベル医学生理学賞を受賞したように、日本が世界をリードしてきた分野。この学会もその発展を後押ししてきたので

接会って話ができるのは大きなメリットだ。安田講堂での開催は21年ぶりで、参加者にとって記念にもなるのではないかと、新型コロナウイルスの感染再拡大や台風の

り、近年では参加人数に減少傾向がみられた。次世代を担う若手や学生に、一人でも多く興味を持ってもらい、参加してもらいたいと考え、今年

はポスター発表の枠を増

た。若手参加者の増加を期待したい」

◆…発表申し込みを受けたい手応えは。

「私の学生時代には、単離・構造決定や化学合成の発表は少数だったが、ガラッと変わった。とくに今年は生合成の口頭発表が13題と多い。この数年は5、6題程度だった。機械学習などデジタル技術の応用に関連する発表申し込みもみられる。こういったテーマは、

この5年、10年くらいで出始めたが、今後、ますます増えていくのではないかと

で、研究領域の重点は様変わりしています。「医薬品のうち天然物や誘導体由来するものが過半を占めており、依然として天然物の有用性は高いといえる。化合物の構造決定や合成にとどまらず、作用メカニズムの解明など、研究のすそ野が広がってきた。物理化学や分子生物学、物理分析など、より多様な学問が必要とされ、学問の垣根がなくなってきた。異分野の人にも興味を持ってもらえれば大歓迎で、そういった人たちも取り込みながら、学会のさらなる発展につなげていきたい」

◆…バイオ医薬品の急成長や新技術の登場など

ポスター発表を拡充

若手・異分野取り込みを

学の3つの学術団体が共催しており、幅広い分野の研究者や学生が集まって互いに意見を交わすことができる。レベルの高い学会で、学生にとって憧れの舞台にもなっている。

◆…4年ぶりに完全な対面方式で開かれます。

「討論会という名前の通り、発表するだけの場ではなく、ディスカッションを重んじている。直

工夫は。

◆…今回の開催に向けた

ポスター発表の実施日も

2日から3日に拡充し

襲来などの懸念があり、予断を許さない。無事に開催できることを祈っている」

◆…バイオ医薬品の急成長や新技術の登場など

長や新技術の登場など

（聞き手＝井上諒）